

あとがき

慎改康之

ミシェル・フーコー著『言説の領界』所収

これは MicrosoftWord によって作成した原稿を pdf 形式に変換したものです。

『言説の領界』に収録されているテキストと若干異なる部分があります。

## あとがき

本書『言説の領界 コレージュ・ド・フランス開講講義一九七〇年十二月二日』は、Michel Foucault, *L'Ordre du discours. Leçon inaugurale au Collège de France prononcée le 2 décembre 1970*, Paris, Gallimard, 1971 の全訳である。

ミシェル・フーコーが一九八四年に他界して三〇年が過ぎた現在、彼が残した小論や対談、さらにはコレージュ・ド・フランスでの講義の記録などが、次々にまとまったかたちで公刊され、日本語にも順次翻訳されて、我々にとって手の届くものとなってきている。今やフーコーの仕事の全容が明らかになりつつあるということであり、これによって、彼の生前に刊行されていた主要著作の数々についても、より正確な読解の可能性および必要性が生じてきた。ここで『言説の領界』として新たに翻訳を試みたコレージュでの開講講義のテキストもやはり、そうした再読に委ねられるべき書物のうちの一つである。一九七一年にフランスで刊行され、その翌年には中村雄二郎氏による日本語訳が『言語表現の秩序』と題されて世に出ていたこの小著を、とりわけ一四年間にわたるコレージュでのフーコーの言葉の全体が『ミシェル・フーコー講義集成』として我々の耳に届きつつある今日、そうした新たな文脈のなかに置き直した上で日本の読者に再提示することは、いわば、研究者にとっての義務であろう。そうした義務を果たす機会が幸運にもここに得られたことを、まずは率直に喜びたい。

本書『言説の領界』の重要性は、それがコレージュ講義の開始を告げるものであるという点にのみあるのではない。この開講講義はまた、一般にフーコーの研究活動の転換期とされる時期に発せられた言説であるという点においても、綿密な再検討に付されるべきものである。つまり、この小著をフーコーによる当時のさまざまな発言やテキストに照らし合わせて読み直すことで、六〇年代の知の考古学から七〇年代の権力分析へという彼の研究の軸の移動について考察するための、何らかの手がかりが得られるように思われるということだ。語り始めることの不安を指摘することから出発しつつ、その不安を払いのけるために社会はどのような手続きを用いているのか、そしてその手続きとの関連における言説の実際の形成をどのように分析すればよいのか、という問いをめぐって展開される開講講義の内容については、「解題」のなかで少々詳しく論じておいた

ので、そちらを参照していただきたい。

本訳書においては、開講講義本文の読解に役立つと思われる情報を、訳注として付した。その際、他の著作からの引用については、既訳のあるものはそれを参照させていた  
だきつつ、必要に応じてそこに変更を加えてある。また、巻末には、人名索引と事項索引を設けた。人名索引には原語表記と生没年を付記。事項索引は、もっぱら、読者が訳語とフランス語原語とを照合できるようにとの配慮にもとづくものである。

翻訳作業を進めるなかで、明治学院大学大学院文学研究科フランス文学専攻の二〇一三年度のゼミナールにおいて本書を講読テキストとして用いたことが、大いに役立った。フランス語のテキストを注意深く読み込んで多くの示唆を与えてくれた明学大学院生の諸君に、まずは感謝したい。そしてまた、『ピエール・リヴィエール』翻訳チームのメンバーであった八幡圭一氏、千條真知子氏にもこのゼミに参加していただき、多くの助言を賜ることになった。ここに一層の謝意を表したい。

最後に、『ピエール・リヴィエール』、『知の考古学』に続き、フーコーの重要な著作の新訳作成を任せてくださった河出書房新社の阿部晴政氏に、あらためて深謝したい。訳者に与えられた任務が十全に果たされているかどうか、それを判断するのは読者である。そうした審判を自己に関する批判作業の契機とすること、これもやはり、学究の徒としての責務である。

二〇一四年 十月十五日

慎改康之